

## 科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 28 年 5 月 27 日現在

機関番号：37601

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2013～2015

課題番号：25370146

研究課題名(和文) 14～15世紀の禅宗庭園の形成背景に関する研究 - 夢窓の再評価から -

研究課題名(英文) Research into the Background of the Formation of Zen Gardens in the 14th to 15th Centuries: Reevaluating Muso Soseki

## 研究代表者

関西 剛康 (SEKINISHI, Takayasu)

南九州大学・環境園芸学部・教授

研究者番号：80461656

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 1,800,000円

研究成果の概要(和文)：14～15世紀の禅宗庭園の形成背景を探るべく、夢窓疎石の再評価を行った。その結果、1) 夢窓が元弘3年の入洛後に作庭に関与した西芳寺庭園と天龍寺庭園で、それまで禅宗庭園を利用していなかった公家らが武家らを伴って、禅宗庭園にもかかわらず王朝文化による使用を始めた。これは王朝文化による利用ができた公家の庭園が、鎌倉末期にすべて衰退したため、禅宗庭園へと移行したことも要因と判明した。2) この禅宗庭園における公家の王朝文化による利用について、夢窓は『夢中問答集』に、禅修行に役立つことを条件に承認していた。3) そして、室町前期の庭園において、禅僧・公家・武家との文化交流が盛んになっていったことが判明した。

研究成果の概要(英文)：In order to delve into the background of the formation of Zen gardens in the 14th to 15th centuries, we reevaluated Muso Soseki. The results indicate that, 1) Kuge (court nobles), which had not made use of Zen gardens, started using the gardens of Saiho-ji and Tenryu-ji that were produced by Muso after 1333, in the context of dynastic culture, involving Buke (samurai families). It was also revealed that the decline of the Kuge gardens that had been available to dynastic culture at the end of the Kamakura period is a factor. 2) Regarding the use of the Zen gardens by Kuge in the dynastic cultural context, Muso was receptive as long as it was beneficial for Zen training, as mentioned in Muchu-Mondoshu. As a result, the cultural exchanges between Zen monks, Kuge and Buke became increasingly lively in the gardens of the early Muromachi period.

研究分野：造園学

キーワード：日本庭園 禅宗庭園 禅宗 夢窓疎石 上皇 天皇 公家 変遷

### 1. 研究開始当初の背景

日本中世の禅宗、特に臨済宗によって形成された禅宗庭園について、今まで庭園史的アプローチから検討されてきた研究成果によれば、そのほとんどが「仏の表現」や「禅の宗旨による宗教的産物」といった見解のみが大部分を占めていた。その中で 80 年代中頃になると、禅宗否定論による研究も一部発表され少なからず進捗したと考えられるが、研究の方向性を示しただけで近年においても、ほとんどといって庭園史では進展していないのが実情である。このような研究背景のもと本研究では、14～15 世紀の禅林における禅宗庭園の形成背景を少なからず解明することを試みた。

学術的特色・独創的な点及び予想される結果と意義については、以下のとおりである。

(1) 14 世紀前半の禅宗庭園を画期的に発展させた夢窓疎石(1275 - 1351)の制作意図に関しても、多くの研究成果は「仏の表現」や「禅の宗旨による宗教的産物」といった見解のみが大部分を占めている。そのため、禅宗庭園における庭園史研究は、近接分野を視野に入れた思想や文化的背景を捉えた研究は少なく、本研究成果によって、この偏った研究態度から幾分か脱却が図れるものと考えた。

(2) また、今までの庭園史とは違う領域から見解を図ることで、「禅」を横断する多様な分野との連携が図れる基礎研究になると考えた。

(3) さらに、16 世紀に発展する後期枯山水の形成背景は今もって明確に解明されておらず、そこにも繋がる基礎研究になると考えた。この未発展の原因には、その前時代となる 14～15 世紀の禅宗庭園の形成背景の研究が未解決であることに起因している。本研究課題の形成背景を明確にすることは、広義に中世の文化芸術における研究分野の活路を見出すことに繋がると考えた。

### 2. 研究の目的

上記の背景及びこれまでの研究成果をもとに本研究は、特に禅宗庭園の形成に深く関与している 14 世紀前期の夢窓疎石を中心に、禅宗庭園の形成背景について明らかにすることを目的とした。特に、14 世紀前半の夢窓疎石を中心とする禅林において、この時期大きく発展した禅宗庭園がどのような禅思想の展開や理論武装を経て、実際的な制作意図をもって形成されたのかについて再考した。

### 3. 研究の方法

本研究の目的を達成するために、古文献(日記・記録等)を対象に検証を行った。

(1) 具体的に本研究では、禅僧と上皇・天皇らの禅宗庭園の利用を調査するために、関連する内容を当時の記録である史料から調査した。研究対象の期間は、建武式目によって室町幕府が始まり、後醍醐天皇(1288 -

1339)の吉野遷御により朝廷が分裂したことで南北朝期となる建武3年(1336)を挟んで、上限は13世紀中頃の後嵯峨天皇(1220 - 1272)の時代の鎌倉後期から、下限は西芳寺再興と天龍寺造営が落ち着く14世紀中頃の南北朝初期までの約100年とした。史料から抽出した記事は、『増鏡』『続史愚抄』『中務内侍日記』『花園天皇宸記』『園太暦』『舞御覽記』『臨幸私記』からの文献データである。この文献データで13世紀中頃から14世紀中頃までの約100年をほぼ網羅した。

(2) また、次に公家・武家らの王朝文化の用途を含んだ禅宗庭園の利用について、夢窓自身がどのように認識していたかを検証するために、自然観や庭園観について夢窓の晩年の著書『夢中問答集』を対象に、文献調査を行った。

(3) そして、武家社会の始まりである足利將軍家の初代尊氏(1305 - 1358)から6代義教(1428 - 1441)までの100年間余の期間、禅僧・公家・武家らが庭園を利用した事例について、当時の日記史料『続史愚抄』『園太暦』『臨幸私記』『空華日用工夫略集』『満濟准后日記』を対象に文献調査を行った。

(4) これらの文献調査により、夢窓が元弘3年(1333)の再入洛前後にあたる、鎌倉末期までと南北朝・室町初期からの禅宗庭園の利用者と利用内容の明確な変遷が把握出来るものと考えた。

### 4. 研究成果

14～15 世紀の禅宗庭園の形成背景に関する研究は、以下の通りの成果が得られた。

(1) 夢窓疎石の再入洛後の禅宗庭園の形成背景に関する一考察

夢窓疎石は、鎌倉末期まで各地を転々として隠棲を繰り返した後、南北朝初期の元弘3年(1333)に建武の新政を開始した後醍醐天皇に招かれて再入洛し、国師となった。その後、夢窓は足利尊氏による新幕府体制の下で、西芳寺庭園の再興や天龍寺庭園の造営をしたとされている。この夢窓の作庭を考察する際に、元弘3年(1333)の再入洛以前の各地で隠棲していた時期に作庭した禅宗庭園と、再入洛後に作庭した西芳寺庭園と天龍寺庭園とは、その使用者や使用内容に大きな相違が見られた。地方で作庭した鎌倉末期までの禅宗庭園はあくまでも禅僧らの禅修行を対象としたものであった。しかし、京において夢窓が作庭した南北朝初期の禅宗庭園では、禅僧らの禅修行に加えて上皇・天皇らの公家や足利將軍家らの武家が、鎌倉末期までの王朝文化に倣って禅宗庭園を使用していた。

本研究では何故、南北朝期に入って上皇・天皇らが禅宗庭園を使用し始めたのかについて探究するため、13世紀中頃から14世紀中頃までの1世紀にわたり、上皇・天皇らの庭園使用に関する文献調査を行った結果、以下のことが判明した。13世紀中頃から次々に変遷しながら上皇・天皇らが使用されてきた

庭園群（鳥羽殿庭園・亀山殿庭園・衣笠殿庭園・冷泉富小路内裏庭園・伏見殿庭園）は、14世紀初期に次々と衰退していった。その中で当時、北山第庭園だけが更なる隆盛を築いて上皇・天皇らに利用され王朝文化の華を咲かせていた。しかし、建武2年（1335）の西園寺公宗（1310 - 1335、西園寺家10代）の謀反発覚により、北山第の所領が没収されたことで突然利用出来なくなった。この西園寺家の財力により運営されていた北山第庭園が利用出来なかったことで、鎌倉末期に王朝の文芸隆盛に必要であった物的資産（庭園）を失うことになった。そのため、上皇・天皇らが主に利用していた庭園群がこの頃すべて失われる事態となってしまった。さらに同時に、王朝の文芸を先導していた後醍醐天皇が、討幕計画に失敗して隠岐島へ流罪（その後脱出し吉野朝廷を開く）となったことで、京における人的資産（文化人）も失うことになり、庭園を舞台とした王朝文化が一気に衰退したと考える。

鎌倉後期に、上皇・天皇らが利用していた庭園群がすべて衰退してしまっただけで、新幕府体制の下で南北朝初期に王朝文化による庭園利用が少なからず可能な場所として、禅宗庭園である西芳寺庭園・天龍寺庭園が光厳上皇によって利用されたと考察した。13世紀中頃から鎌倉後期までの上皇・天皇らによって使用された鳥羽殿庭園・亀山殿庭園・衣笠殿庭園・冷泉富小路内裏庭園・伏見殿庭園での利用内容（観賞・詠歌・舟遊び・管弦・舞楽・酒宴・蹴鞠・観月）は、夢窓が作庭した南北朝初期の西芳寺庭園や天龍寺庭園での上皇・天皇らの利用内容と基本的に酷似しており、継承されていたことが確認できた。鎌倉後期に利用されたこれらの公家の庭園が失われはしたが、南北朝初期の禅宗庭園である西芳寺庭園や天龍寺庭園（景勝地嵐山周辺を含む）に御幸し、規模は縮小したとはいえ舟遊び・鑑賞・管弦（奏楽）等の同様の利用内容を行ったと考察した。

（2）夢窓疎石の再入洛後に作庭した禅宗庭園を上皇・天皇らが利用できた禅理論

再入洛した元弘3（1333）年以降、夢窓によって作庭された西芳寺と天龍寺の禅宗庭園が、上皇・天皇らにより王朝文化による庭園利用がされていたことにより、前時代から継承されていた王朝文化による利用であったことが判明した。では、禅宗庭園としての禅修行の用途と、本来は適さないはずの上皇・天皇らの王朝文化としての庭園用途を、夢窓は如何に禅宗庭園内に共存させるべく禅理論の構築を図ったかについて検証・考察を行った結果を以下に記した。

夢窓は、足利将軍の初代尊氏の弟である直義（1306 - 1352）との問答を収めた『夢中問答集』のなかには、その当時の禅のあり方から自然観や庭園観等までも説かれていた。例えば、素晴らしい自然景観を「清らかなる興趣」と捉えて、その境地を理解できる仏心に

まで達する必要性を述べていた（第76問答）。また修行方法は、座禅等の修行だけではなく、仏道修行を目的とするためであれば、素晴らしい自然景観や庭園の観賞から、喫茶・詩歌・管絃等を如何なる場所と時節でも催して構わないと認識していた（問答57段）。このことは、外護者であった公家や武家側が禅宗庭園において、王朝文化としての庭園利用を行える理論構築でもあったと考察した。

（3）夢窓疎石の再入洛後に作庭した禅宗庭園が室町文化に与えた影響

鎌倉期から継承されてきた上皇・天皇らの公家の庭園における王朝文化の利用は、14世紀中頃の室町將軍初代尊氏・2代義隆（1330 - 1367）の室町幕府草創期の時代には、公家と禅僧らが共に禅宗庭園を利用して、禅修行と王朝文化の利用が共にされており、その禅理論の整合性は夢窓によっても図られていた。

夢窓の没後となる14世紀末期から15世紀初期の3代義満（1358 - 1408）の時代には室町幕府隆盛期となり、義満はじめ公卿の二条良基（1320 - 1388）や禅僧の義堂周信（1325 - 1388）らの和漢聯句等の詠歌を伴って、各庭園（西芳寺・二条殿・大慈院・等持寺・室町殿・北山殿等）も文化サロン化した時代となった。

義満没後の15世紀前期に及んでも、西芳寺庭園が再興当初からの上皇・天皇らの遊興の場としての庭園利用が継続しており、その用途は定着していた。

そのため、南北朝初期からは、禅宗庭園をも舞台として禅僧（臨済宗）と公家・武家との3者の文化交流が始まり、盛んになったことで、この後の室町文化に大きく影響していた一要因と考察した。

## 5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕（計3件）

- （1）関西剛康、室町前期の上流階級における庭園利用に関する考察、（公社）日本造園学会九州支部、研究・事例報告集（査読無し）、Vol.23、P7-8（2015）
- （2）関西剛康、鎌倉後期から南北朝初期における上皇・天皇らの庭園利用に関する一考察、（公社）日本造園学会、ランドスケープ研究（査読有り）、Vol.78 No.5、P487-492（2015）
- （3）関西剛康、夢窓疎石の禅宗庭園観と王朝文化との整合性に関する考察、（公社）日本造園学会九州支部、研究・事例報告集（査読無し）、Vol.21、P7-8（2013）

〔学会発表〕（計3件）

- （1）関西剛康、室町前期の上流階級における庭園利用に関する考察、日本造園学会九州支部長崎大会、平成27年11月14日、長崎大学
- （2）関西剛康、鎌倉後期から南北朝初期における上皇・天皇らの庭園利用に関する

- る一考察、日本造園学会全国大会、平成 27 年 5 月 24 日、東京大学
- (3) 関西剛康、夢窓疎石の禅宗庭園観と王朝文化との整合性に関する考察、日本造園学会九州支部大分大会、平成 25 年 11 月 1 日、ホルトホール大分

6 . 研究組織

(1) 研究代表者

関西 剛康 (SEKINISHI Takayasu)  
南九州大学・環境園芸学部・教授  
研究者番号：80461656